

昨夜、アルバムの中にパパとママを発見した。鴨居恭子の写真を調べるために漁ったとき、そのままに床に放置されたアルバム群。

ママやパパの写真は見えるのだと驚愕した。一時の昂奮は、なぜだろう、という冷静な疑問へと転換した。

そもそも、何故と考えると、これが結果だと思っていた。しかし、これが原因だとしたら、流れた時間でなく、これからの時間を失っていることになる。だから写真の中の記憶には僕に留まっている。

空白や不在でなく、回想だけが息づいている罪の意識とはなんだろう。……むしろ意味をつくりだしているのは未来ではなからうか。これから立ち向かう無の時間に言語が集うだけなのだろうか。

そこにしか実態のある人間は、いない？

パパの書斎は、今も僕の部屋の隣で自由に行き来できる。

本棚を見ると『消失刑』という外国の小説本があることに気づいた。刑罰は透明にされることで、世間から乖離されること。では、僕は、家族から離される刑罰でも受けているのだろうか。そんな良心の贖罪などいまだ古臭く感じるのだった。

私を含めて三人……共通するのは……なにかしら、と美里の推理が始まった。

「透明化した対象に共通点はあるのかしら」

「たぶん、一番身近な事としか言えない」

「じゃ、透明化を解除して見えた理由は？」

そういえば、タムタムが出現する前に、仙野から鴨居恭子の台風で亡くなったことを聞いた。

今井先生が見えたのは仙野の交通事故死の葬儀のときだった。

「最初に透明化があるってこと？」

そのことに起因があることさえわからない。

「でも、あなたのママが見える為には、そんな関係にならない？」

「さっきから考えていたんだけど、鴨居さんって別のクラスでしょう」

「たぶん仙野が知ってたみたい。僕たちには隣のクラスの人で、顔も覚えていない」

ああっ、そっか、と美里が何かを思い出したようだ。

「ほら、唯一、その鴨居さんと遊んだことあるじゃない。あの鉄塔にいた三人だわ」

「鉄塔？」

僕は初めて聞く情報に目を震わせるようにして考えた。

「だって、鉄塔に居た三人の他は、あなたよ」

あなたよ……と言う、冷たい指摘で一瞬、言葉を失う。

けど、次には、その記憶が薄れて、なんのことかわからなくなる。

「鉄塔って何だっけ」

「やっぱり、共通点は、それしか思い出せない。私たち四人で近くの送電線へ遊びに行ったこと思い出せない？」

僕は、あっさりと知らない、と言った。本当に覚えていない。

「あの時、地上に私もいたのよ」

鉄塔の下にいたのは、鴨居恭子と仙野、そして里美らしい。

美里はふっと思慮深い顔をつくった。

ン？

じゃ、そのとき僕はどこにいたの？

契は、天から降ってきたのよ。

えっ。